

【論文】

明治期の東京における「娘大人形」について

—女性による三人遣いの人形浄瑠璃

細田 明宏

一、はじめに

女性の人形遣いによる人形浄瑠璃としては、乙女文楽が広く知られている。乙女文楽は、特殊な器具を用いることによって三人遣いの人形を一人で遣うようにしたものであり、昭和初期の大阪で成立した。現在でも伝承および上演活動が続けられている。独特な機構を用いる操法であることや、若い女性を起用して全国的に興行をおこなったことなどから注目されてきた。昨年末には展覧会「乙女文楽―開花から現在まで」(大阪大学総合学術博物館、二〇二二年一〇月一八日から二月一八日)も開催されている。

ただし乙女文楽は、女性による人形浄瑠璃の第一号だったわけではない。あまり知られていないが、乙女文楽以前にも女性による人形浄瑠璃がおこなわれていたのである。それらは文楽座などと同様に三人遣いによるものであり、「娘(女)大人形」「娘(女)人形」などと呼ばれていた(以下、本論では「娘大人

形」と呼称する)。この場合の大人形とは、人形芝居に用いるものとしては比較的大型の、三人遣いの人形のことをいう。娘大人形は明治から大正前期にかけて寄席を中心に上演されており、一部ではよく知られた存在だったようである。

かつての東京で娘大人形が手軽に楽しまれていたことは、例えば明治二十七年（一八九四）三月六日付け朝日新聞の記事からもみてとることができる。これは同月四日の午後一〇時頃に東京・芝区の鋳物工場で火災が起こったことを報じるものであるが、それは火の番を任された二五歳の男性従業員（鋳物職）がこっそり持ち場を離れたことよって起こった。その記事によれば、彼は「近所へ牛飯を食ひに出掛けた」のであるが、その「帰途、同区金杉二丁目の寄席仙波亭へ入り、娘人形^{〔1〕}を見て居たところ」で火災の発生を知ったという。当時の寄席における娘大人形は、工場労働者が夕食後にふらりと立寄るような、手近で気軽な芸能だったのである。

しかし明治の終わり頃には娘大人形の人気は下火となっていたようで、大正期には興行が途絶えたと思われる。その結果、こんにちではすっかり忘れられた存在となってしまうのである。

この娘大人形に関しては全くといっていいほど研究がなされておらず、これまでまとまった形で紹介されたことはないようである。そこで本論では、新聞や雑誌の記事を検討することによって娘大人形の活動の一端を明らかにしたい。なお一部の新聞記事に関しては、倉田喜弘編『明治の演芸』一一八（国立劇場調査養成部芸能調査室、一九八〇―一八七）および倉田喜弘編『東京の人形浄瑠璃』（日本芸術文化振興会、一九九一）に収録されているものを参照あるいは引用した。

二、坪内逍遙が見た娘大人形

明治三〇年（一八九七）四月一日、劇作家・評論家の坪内逍遙は、東京の浅草公園を散策中に偶然、「西川伊三郎一座」の興行をおこなう芝居小屋を見掛け、観劇した。その時の体験記が、東京で発行されていた『義太夫雑誌』誌上で翌月発表されている（逍遙生 一八九七 「浅草公園の人形」『義太夫雑誌』一八）。五代目西川伊三郎（一八四四—一九〇五）といえ、東京を中心に活躍していた男性の人形遣いであり、名手として知られている。しかし逍遙によれば、浅草公園における「西川伊三郎一座」の興行に、伊三郎は出演していなかった。その時の主たる遣い手は女性だったという。

つまり逍遙が見たのは娘大人形の興行だったのであり、彼による『義太夫雑誌』の記事は、娘大人形の興行の実態を伝える貴重な記録となっている。そこで長文ではあるが、ほぼ全文を引用することとした。なお引用に際しては読みやすさを考慮し、漢字は通行の字体に改め、かぎ括弧などの符号を加え、改行を施すなどしている（全ての引用において同様）。

先月の十五日、…道を浅草に取り…散歩する折しも、…サツと降り出す春雨に足進まず池^{ちへん}辺に逡巡する時、向ひの小屋に西川伊三郎一座として人形興行の小屋を見出しぬ。こは噂^{うさ}には聞^きたれどいかなる景況^{やうす}にや見まほしくも思へば、幸なる雨宿りと木戸に立寄り大前二銭を払つて内に入り、棧敷代、火鉢、布団、各一銭宛下足代五厘通、計金五錢五厘。

是が午前十時より午後五時迄人形演芸十幕を観て耳目^{あたま}を楽しむる価^{あたい}と聞て「余りに廉^{やす}過^ぎはせずや」

と考へる間もなく、幕が明けば『勢州阿漕浦』平治住家の段にて、床には万年新造現れて弾語りの大車輪。人形の方も同じ年輩の婦人にて出使いなるが、丸々と肥りたる別品が座頭らしく、之に垂ぎて瘦がたなるか巻頭の人物らしく孰れも技芸に熟して一見の価値は十分にあり。

「前幕には女の弟子を呼びて中幕以後西川一座の男子現はる、こと」と察し見て居る内、雨は益々本降りとなりて迎も急速に霽れべき氣勢も見えず此間場内へ雨舎り兼帯の見物押込み、大凡四、五百はあるべき天窓数となりたれば、出方は弥勉強して殆ど幕無し位の有様、五斗の鉄砲場、貸見世、累の土橋、鏡山御殿、等引続きて演じ出せど、余が鑑定は外れていつも年若の別品のみ。男子は左手の黒ん坊にあるのみ。仍て思ふ、「初めに余り廉過たりと思ひたるは即ち此組織なればなるべし」。

これは恰も桃の屋翁が婦人演芸者の奨励に就て論ぜられたる組織を歌舞伎座、東京座、とすれば、是は丁度其柳盛座、開盛座、位に必的するものにて、左に右に皆女子のみを以てしたるは妙なり。されどいつも人形よりは床の太夫の方劣り居れば引立ず。それに天井なく高き屋根裏の見えて場内も広ければ、男太夫が出て語るも声の通らざるに苦しむならん其構造、女太夫殺しとも申たき程なり。それ等は人気の付くに随ひて漸次改良すれば良からん。

土地柄のこととて見物の出入劇しく、一幕二幕にて出る人も多ければ、木戸銭はやすく共、入換りの人数をもて算すれば却て他の人形座及び寄席などにも劣らざるべくや。伊三郎の技芸を見んとて表の看板に欺かれて入来る人々失望の様子にはあれど、女ながら同人門下のこととて能く達者に使用ひ回せり。同人も看板に名を仮すのみになく、楽屋に在て斡旋尽力するに非れば、斯く人形のみなら

ず人間が働かざるならん。今は試験中の興行として、是より追々に改良し、後遂に西川一座の定小屋と一般に知れ渡る様にならば、自身出使ふことは勿論、又時としては門弟女子のみに人気のある女太夫を付けて興行するも亦一策なるべし。

余傀儡棚の衰頹を痛惜むこと年久し。偶然今日春雨の爲めに降込られて料らずこゝに爛漫たるこの花方を観る。雲にも紛ふ鬢辺の白粉、春色濃かなる光景、真に愛すべし。

この文章は多くのことを教えてくれる。まず入場料（木戸錢）は二錢であり、それに付加される棧敷代や火鉢代・布団代が各一錢、下足代が五厘で、それらを合計しても五錢五厘と安価であった。上演は午前一〇時から午後五時までで、その間に一〇幕もの演目を上演した。具体的な演目は、『勢州阿漕浦』平治住家の段、「五斗の鉄砲場、貸見世、累の土橋、鏡山御殿、等」である。

入場者は、雨宿りをも目的とする者もいたためか、四、五百ほどとかなりの人数にのぼった。一幕あるいは二幕のみを見て出る客も多く、観客の入れ替わりが激しかったという。入場者の多くにとつて娘大人形は、じつくり観劇する対象というよりは、手軽に楽しむ娯楽だったといえそうである。

演者についてみておこう。床を勤めたのは女流の義太夫節淨瑠璃、いわゆる娘義太夫であった。『勢州阿漕浦』平治住家の段を弾き語りした演者は「万年新造」、すなわち若々しく見えるものの実際の年齢は見た目よりも年上に思えたのだらう。逍遙は太夫に対して、「いつも人形よりは床の太夫の方劣り居れば引立ず」と厳しい評価を下している。もっとも公演会場そのものが、「声の通らざる」構造となつてお

り、太夫にとっては決して好ましい環境ではなかった。しかし結局のところこの興行は、「西川伊三郎一座」という名前だったことからわかるように、人形に主眼が置かれており、浄瑠璃は従属的な立場にあったと考えられるのである。

人形操りは、一体の人形を三人が操作する三人遣い操法によってなされた。また出遣いがおこなわれ、中心的な遣い手である主遣いは観客に顔を見せて演じた。そしてほとんどの人形遣いは女性であり、男性は黒衣姿の左遣いがいたのみだったという。

人形遣いたちは「能く達者に使ひ回せり」と評され、太夫とは対照的にその技量を認められている。とりわけ『勢州阿漕浦』平治住家の段に出演していた二人の遣い手、すなわち「丸々と肥りたる別品」と「瘦がたなる」人物は、いずれも「技芸に熟して一見の価値は十分にあり」と称賛されている。なお彼女らはその場の床を勤めた「万年新造」と同年配であったが、その他に「年若の別品」も出演していた。一座は、ベテランから若手までの人形遣いが揃った充実した陣容だったと思われる。

以上のように逍遙は、遣い手たちの技芸を高く評価している。その上、遣い手たちが女性ばかりであることについても、「皆女子のみを以てしたるは妙なり」と好意的である。規模がそう大きくないために、歌舞伎という大芝居（歌舞伎座、東京座）ではなく小芝居（柳盛座、開盛座、位）に相当するとしているが、改良を重ねることによって「西川一座の定小屋と一般に知れ渡る」ことも可能だとする。逍遙は、その後の「西川伊三郎一座」の活動に大いに期待を寄せているのである。

三、代表的な演者

前章でみたように、明治三〇年（一八九七）四月一五日に浅草公園で「西川伊三郎一座」の名のもとに娘大人形の興行がなされた。その時に初めて娘大人形を目にした坪内逍遙は、これを「試験中の興行」とみてゐるが、必ずしもそうとはいえないようである。というのは、前年の明治二九年（一八九六）一月一三日付けの万朝報には「来る十六日より昼夜二回、両国回向院に於て西川伊三郎門下の女人形遣ひが、娘義太夫連中及び大坂初登り数名を加へて人形芝居を興行し、大切には伊三郎も出勤する由」という記事が出ていたのであるが、この興行は明治三〇年の浅草のものと同様の形式である。当時、伊三郎門下の女性の人形遣いによる同種の興行がしばしばなされていた可能性も考えられる。

後述するように、この時期には実際かなりの頻度で娘大人形の興行がおこなわれている。ところがそれらの多くは寄席などでの小規模な興行だったと思われる。娘大人形の興行に足を運ぶ人は一定程度はいたはずであるが、広範囲の人にそれが知られているといった状況ではなかったと考えられるのである。自ら「傀儡あやつりざの衰をれを痛惜をしむこと年久し」と述べる逍遙が娘大人形の存在を知らなかったのもそのような事情からではないだろうか。

ところで明治三一年（一八九八）五月一五日に発行された『義太夫雑誌』三〇号の投書コーナーには、「婦人の人形てすり使りは何時頃より始まりしものによ、斯道通の諸君垂教を仰ぐ」との質問が掲載されている（ただしこれに対する答えは見当たらない）。「外外神田偶偶狂子」を名乗る投書の主は、娘大人形が存在することを知った上で、その起源について問うているのである。このことは当時娘大人形について、ある程度の

認知はされているものの、成立した経緯などの詳しい情報が広く知られるほどの状況ではなかったことを示すものであろう。

実のところ、娘大人形についてはあまり多くのことは語られていないようである。そこで注目されるのは、明治三十一年（一八九八）六月二六日付けの毎日新聞に掲載された五代目西川伊三郎の聞き書き（こたま「西川伊三郎の話」）である。関連する部分を引用しておこう。

女の人形遣ひでございますか。組之助、錦之助などが、未だに寄席へ出て居りますが、兩人共皆私の弟子でございます。今では婆の方へ近寄って居りますが、新造の頃は文金の高島田に黒紋服と云ふ、至極高尚な打扮いでたちで、人形を遣つたから、サアお客さまの騒ぎは大したものでございました。何うして此女人形遣ひを起したかと申しますれば、其頃名古屋より女人形遣ひが乗込むと云ふ噂がございましてから、私は大きに心配致し、一番鼻を明して遣らうと思つて、組之助、錦之助の兩人を始めて島原の近源へ出しました。是が抑も東京に於ける女人形遣ひの根源でございます。其時私は兩人に申聞もつしきけますには、「汝達おまいたちは女の事であるから、何年いっぴまでも芸人になつて居る訳にいかない。大体たいぶに足を洗つて、身を固めた方が宜い」と云つて、三年間の約束を為して、演やらせ始めたのでございませう。所が珍しいから、大きに人氣に適ひ、三年は疎おろ十年経つても、容易に廃業する訳にいかなくなりました。

これによれば伊三郎は、かつて「名古屋より女人形遣ひが乗込む」という噂を聞き、その動きに対抗するために弟子の「組之助、錦之助の兩人」を新富町（通称島原）の寄席である「近源」へ出演させた。これが東京における娘大人形の始まりだというのが、それは少なくとも一〇年以上前、すなわち明治二一年よりも前のことであった。当初は三年間のみの予定だったが、珍しさも手伝って「大きに人気に適」ったため興行を続けることとなった。特に組之助や錦之助が若い頃は、「文金の高島田に黒紋服」という高尚で優美な髪型や衣裳で人形を遣ったため、「お客さまの騒ぎは大したもの」という状況だったという。

伊三郎の発言は裏付けがとれないため、事実をどこまで正確に反映しているのかは不明である。あくまでも彼の目から見た真実が語られていると考えるべきであろうが、具体性に富んでおり貴重な証言となっている。

興味深いのは、自身の弟子として組之助および錦之助の名前のみを挙げていることである。彼女たちは、伊三郎の女性門弟を代表する存在なのである。前年に浅草公園でおこなわれた「西川伊三郎一座」の興行に参加していた可能性も十分にあると考えられる。

組之助および錦之助は、思いがけない形で本名や生年が知れる。まず組之助については、明治三二年（一八九九）一〇年二月付けの朝日新聞に、警察署に拘留されたという記事が出ている⁽²⁾。それによれば、おさらいの名目で手ぬぐいを配って「返し金」を取ったことが問題視されたという。金銭を強要した罪に問われたのであろうか。記事中に「数名の弟子は大騒ぎ」とあるので、組之助自身も弟子を持っていたことがわかる。悪意が感じられる文章ではあるが、記事の一部を引用しよう。

人生五十の通相場を越しても、尚ほ娘人形といふ看板打つて、金紋の肩衣に赤い衣裳の若作り、手摺の上の早替りより楽屋の内の早替りを見れば、お白粉の落ると共に娘忽ち老婆と変ずるは、人形遣ひ西川組（ふみのすけ）之助事大川お町（おほかは）（五十二）といふ芸人なり。

この記事によれば、西川組之助は本名を大川お町といい、東京・神田区五軒町在住で当時五二歳だといふ。年齢から逆算すると、弘化三年（一八四七）または嘉永一年（一八四八）の出生ということになる。当時は五二歳であったが、娘のような若々しい装いをして「娘人形」として舞台に立っていたという。

錦之助については、自宅に潜んでいた泥棒を言葉巧みに誘導して逮捕に至らしめたと明治三一年（一八九八）四月一五日付けの朝日新聞で報じられている。記事冒頭を引用しよう。

下谷区二長町二十番地娘人形遣ひ西川錦之助（きんのすけ）こと日置お幸（へき）（二十八）が一昨日の午後一時頃、抱へ車夫紋太郎の車に乗つて山の手の寄席を回り、同四時頃帰宅して見ると、奥なる六畳の間より見馴れぬ一個の大男が飛出せしゆゑ、思はずオヤと驚きしも、其処（そこ）が芸道不思議の尺合（か）ひ、車夫紋太郎に配目（めくば）せしながら「妾（わたし）へ御用の有るお客様だから、直（す）に奥へお連れ申して下さい。貴郎（あなた）御遠慮なさいますな」と舌三寸にて操り置き、自分は忽ち日高川の清姫、鬼ともなり蛇ともならん人形振（にんぎやうぶか）を其儘の勢ひにて最寄の派出所へ急訴せしかば、巡査早速出張になり其大男（そのお）を調べし

この記事によれば、西川錦之助きんのみすけは本名を日置お幸へきおこうといい、東京・下谷区二長町在住で当時二八歳だといふ。年齢から逆算すると、明治二年（一八六九）または三年（一八七〇）の出生ということになる。

さて伊三郎と同様に、東京を中心に活動していた男性の人形遣いに三代目吉田国五郎（一八三八—一九一四か）がある。国五郎もまた名手として伊三郎と並び称される存在であったが、彼も吉田国之助という女性を弟子に持っていた。国之助については、明治一三年（一八八〇）六月一五日付のいろは新聞にゴシップ記事が出ている。記事の冒頭は次の通りである。

近頃流行娘大人形はやるの一座へ出る吉田国の助（十八）は木挽町二丁目十番地に住、旧はも組の芋頭と
かであった金子といふ鳶の次女、当世風の丸ボチャゆゑ当込あてこみの見物連が多く評判もよかつた

この記事から国之助が、木挽町在住の金子という鳶職の娘で当時一八歳であったこと、好評を博している娘大人形一座に出演していたこと、容貌が目当ての「見物連が多く評判もよかつた」ことなどがわかる。

ところがその三年後の明治一六年（一八八三）六月一〇日付けの読売新聞では、国之助とその父が共謀して詐欺を働いたとして捕まり、親子とも重禁錮（現在の懲役刑に相当）に処せられたと報じられている。記事には「一トころ操り人形遣ひ吉田国五郎の門人となり、芸名を吉田国之助と名乗て寄席へ出た芝森元町金子房次郎の娘お浅（二十一年）」とあるので、本名は金子お浅であり、東京・麻布区芝森元町在

住で当時は二二歳だったとわかる。年齢から逆算すると、生年は文久二年（一八六二）または三年ということになる。

以上において、伊三郎門下の西川組之助および西川錦之助、国五郎門下の吉田国之助をみたが、次章で検討するように、この三人は明治中期から後期の東京において寄席への出演が際だって多い。東京における娘大人形の人形遣いを代表する演者だといえるだろう。

ところで明治期には、娘義太夫の演者をランク付けして大判の紙に記した番付がしばしば発行されている。そのうちの一つに、『明治廿六年改正新版・東京娘義太夫見立番付』（図一）がある。これは東京・浅草の地本問屋であった片田長次郎が明治二六年（一八九三）に出版したものであるが、特徴の一つは、紙面の中央に「大人形」の欄があることである。ここには娘大人形の遣い手が数名記されているが、上段中央に西川組之助、その左右に吉田国之助および西川錦之助が位置している。この番付においても、この三名が娘大人形の代表的演者として扱われているといえる。なお次章でみるように、下段の西川若伊三および西川伊呂波（伊呂葉）も娘大人形の演者として寄席に出演している（豊竹岡の助については不明）。

四、寄席における興行

前章でみたように、明治二九年（一八九六）一〇月一三日付けの万朝報では、「西川伊三郎門下の女人形遣ひ」が両国回向院で興行する予定だと報じられている。このように当時の新聞には、娘大人形の興行を予告する記事が掲載されることがある。そのようなもののうち、今回確認できた最も早い例は、明治九

図1. 『明治廿六年改正新版・東京娘義太夫見立番付』（倉田喜弘編 1984『明治の演芸』5、国立劇場）。



年（一八七六）六月一三日付け横浜毎日新聞の記事であるが、それは次の通りである。

東京新富町の近源亭は、またよい金元でも付いたか、今度、西京から女の人形使ひを七人と道具方、三味線引とも都合二十四、五人、いづれも別品玉揃を呼び登せ、当二十日過には大入りに成ると申升。此人形の大きさは十四、五の子供ぐらゐで、木戸銭は大人三銭、子供一銭五厘で、直段にしては面白からうとの評判く。

新富町の近源亭で、京都から呼び寄せた七人の「女の人形使ひ」による興行をおこなうという内容である。京都の人形遣いといえば、その二年半後の明治一二年（一八七九）一月二四日付け大阪新聞に、「心齋橋筋周防町西へ入る梅の席にては、昨二十二日より竹本段玉、同三吉の一坐にて始める人形は、西京下の女人形遣ひ吉田小玉の一坐で、出遣ひ、早替りなども致すといふから、サア面白からう」との記事がみえる。吉田小玉の詳細は不明であるが、明治九年の七人の「女の人形使ひ」は、あるいは吉田小玉の一坐なのであるうか。なお女性の人形遣いに関する記事のうち、東京以外のものはこれしか確認できなかった。おそらく東京以外ではほとんど女性の人形遣いは発展しなかったのであろう。

さて近源亭については、その二か月ほど後の明治九年八月二日付け郵便報知新聞で、次のように報じられている。

新富町一丁目の割烹家近源亭では：新工風の大人形を目論見、遣ふ手事も織々たる子女のみにて、竹本連の浄瑠璃は何れも別品の玉揃ひ、狂言の大名題は『菅原伝授手習鑑』二段目より四段目迄、「車引の段」金枝、「佐田村の段」豊久、「桜丸腹切の段」芝輔、「松王屋敷の段」浪家寿、「寺子屋の段」京寿、中幕の前に一寸艶物で『桂川連理柵』『帯屋の段』京佐渡（此間も当社の雑報へ載た頗る別品）、中幕は『源平布引滝』『松波検校琵琶の段』京枝、又大切は大道具早替り『播州皿屋敷』『鉄山館の段』座中惣出なり。又人形遣は国三郎、網枝、友吉、芝輔、金八、富士松、寿々吉、豊久、佐渡吉、其外許多あり。男は唯り後見の吉田金糸、同金花、豊松国八の三人のみで、弥昨一日より毎日午前十時から興行、木戸は一人僅か二錢八厘。

この記事では、近源亭において娘義太夫の床で女性のみ「大人形」の興行があるが、その人形遣いは、「国三郎、網枝、友吉、芝輔、金八、富士松、寿々吉、豊久、佐渡吉」などであるという。しかしこの国三郎ほかの人形遣いについては他の記事で名前をみることにないため詳細が不明であり、人形遣いとして継続的に活動したかどうかもわからない。なお近源亭といえば、前章でみた伊三郎の聞き書きにおいて、東京での娘大人形が最初に興行された寄席とされていることが想起されるが、その経緯は伊三郎の発言内容とは食い違いがある。

このように明治九年の近源亭における興行、あるいは明治一二年の吉田小玉については、情報が乏しく、詳しいことはわからない。ところがその後ほどなくして、組之助や国之助、錦之助などについての記

事が散見されるようになる（前述）。その中には興行を予告する内容のものもある。たとえば明治一八年（二八八五）二月一日付け読売新聞では次のように、「吉田国之助の連中」が娘義太夫によって興行する予定だと報じられている。

浜町の東華楼にて来る五日より興行する人形芝居は、吉田国之助の連中にて「太功記」の押通し。
 浄瑠璃は竹本清花連中にて、毎日午前十時より午後六時までと極り、三日目毎に差替へ。早替り、見
 台抜け、柱抜け、宙乗等をするとの事。

また明治一八年（二八八五）一〇月一日付け今日新聞には、「神田神保町の神保園に於て今晚より娘操り人形の興行があります」との記事が掲載されているが、同月三日付けの東京絵入新聞によれば、その興行は「西川国之助の娘大人形」なのだという。

さらに国之助については、明治二二年（一八八九）九月一五日付け下野新聞に栃木・宇都宮で興行した時の記事が出ている。

明神前の掛小屋にて久しく興行せし吉田国之助一連の人形と、竹本染子、鶴沢花八連の浄瑠璃合併の一座は、其興行小屋を暴風あらしに吹き壊されしが、已に日限も切れしかば其仮止め様かとは思ひしが、非常の喝采を得し揚句に小屋が壊れて止やめたなどと云囃されては、第一かる石の旧幕面ぶらがたたぬとの奮

図3. 欄外に掲載された「寄席案内」の例。明治31年（1898）9月15日付け読売新聞。最後尾に「西川錦之助」がみえる。



しまうことがほとんどである。このような問題はありますが、全体的な傾向をつかむことは十分可能であると思われる。

出演者予告記事に掲載された演者には、「女人形国之助」「娘大人形錦之助」のように種目名が付されることがある。それを手がかりにすることで娘大人形の興行とその演者を抽出することができる。もつともこの方法には限界がある。種目名が付随していない演者については娘大人形かどうかの判断ができないこと、男性の名義でなされた娘大人形の興行（前掲の「西川伊三郎一座」）が漏れてしまうことなどである。しかし実際のところ、そういったケースはそう多いものではないと思われる。娘大人形の全体的な様相を知る上で大きな障害とはならないであろう。

調査の対象としたのは読売新聞および東京朝日新聞である。出演者予告記事は、都新聞などにも出ているが、両紙は掲載が比較的長期に及び頻度も高い。掲載されている期間は、読売新聞が明治一八年（一八八五）の一月から七月および明治二五年（一八九二）二月から明治四〇年（一九〇七）、朝日新聞が明治三三年九月から大正二年（一九一三）一月である。

そこで明治一八年（一八八五）の一月から七月および明治二三年（一八九〇）九月から大正二年（一九一三）一月の間に、読売新聞および東京朝日新聞に掲載された寄席の出演者予告記事に掲載された娘大人形の興行を抽出した。本論末尾の表一は、その結果をもとに作成したものであり、ある演者がいつどの寄席で興行したかということを一覧表にしている。ただし明治四三年（一九一〇）以降は掲載の頻度が下がる上に娘大人形の興行が全く含まれていないため、表一からは除外した。また両紙とも記事が掲載されていない場合には個々の演者の欄を設定せず、全体をグレーで色付けすることによってそのことを示している。

組之助、国之助および錦之助の興行が突出して多いため、表一ではその三者以外の演者を「その他」としてまとめている。演者名については、表記の揺れ（「国の助」「国之輔」など）は反映させていない。また種目名や「（国之助）一座」「（国之助）連中」など、演者名以外の要素は省略した。なお、まれに二つの寄席で同一の演者名が挙げられていることがある。掛け持ちなどがその理由として考えられる⁽³⁾が、その場合は寄席を二行に並べて記載している。

出演予定の寄席については、当時の区名あるいは地名（区外の場合）を付しておおよそその地域がわかるようにした。なお区以下の町名などは省略した。また当時の寄席は通常、半月で演者が入れ替わるので、ひと月を上・下の二つに分けて表記している。ただし興行が好評だった場合、次の半月も演者を変えずにそのまま打ち続ける場合がある（「日延べ」あるいは「打ち越し」などという）。なお明治三〇年（一八九七）一月は、皇太后死去により一二日から一五日間歌舞音曲停止とされて寄席が休業したため変

則的な編成となっている。

さて表一には全部で五〇〇の寄席興行が収録されており、娘大人形の興行が継続的におこなわれていたことがわかる。内訳は、組之助一七一、国之助九四、錦之助一七三、その他六二である。出演者予告記事を検討することによってはじめて、娘大人形の全体像を窺い知ることができるようになったといえるだろう。しかもすでに述べたように、抽出漏れなどによりこの表に記載できなかった興行もあると思われる。また調査対象とした出演者予告記事に掲載されていない興行もあるであろう。したがって実際には、これよりもさらに多くの興行がおこなわれたはずである。

次に年代による変遷についてみてみよう。まず明治一八年（一八八五）前半および二三年後半から三三年（一九〇〇）前半までは興行の頻度が高く、ほぼ毎日いずれかの寄席で娘大人形の興行がおこなわれていたことがわかる。この間、少なくとも一〇年以上にわたって組之助、国之助、錦之助の三者は継続して寄席に出演している。しかも明治二三年（一八九〇）から二五年までは、その三者に加えてその他の演者による興行も多い。特に明治二四年八月前半は五つ、明治二五年八月前半は六つもの寄席で同時に興行がおこなわれる盛況ぶりである。明治一八年後半から二二年までの状況が不明であるが、明治二〇年代前半が娘大人形の最盛期であったと考えてよいのではないだろうか⁽⁴⁾。

一方で明治三三年（一九〇〇）後半からは組之助および国之助の名前が消え、錦之助のみが活動を続ける状況となる。その錦之助の名前も明治三九年（一九〇六）一二月前半を最後に見られなくなると、それと入れ替わるように西川浜吉の活動がみられるようになる。しかし全体としてみると、明治三三年後半か

らは興行の頻度が落ちており、娘大人形の人気は退潮期を迎えたといえるだろう。

ところで組之助、国之助、錦之助の三者が息の長い活動を続ける一方で、その他に含まれる演者たちは浜吉を除き、明治二五年（一八九二）以降にはあまり名前が出てこない。ここで彼女たちの芸名に注目しよう。小伊三郎（小伊三）、若伊三、伊三子は、その芸名から判断するに伊三郎門下だと考えられる。「伊」の字が共通する伊呂葉もその可能性が高い。すなわち浜吉を除く「その他」の演者はほとんどが伊三郎の弟子だと考えられるのである。

ここで第三章に引用した伊三郎の言葉を思い起こそう。彼によれば東京における娘大人形の始まりは、弟子の「組之助、錦之助の兩人」を寄席へ出演させたことだった。つまり彼に従えば、「組之助、錦之助の兩人」が娘大人形の第一世代ということになる。また坪内逍遙によれば、明治三〇年に「西川伊三郎一座」の名で興行した娘大人形の座には、「技芸に熟し」たベテランの他に「年若の別品」も出演していた（第二章）。伊三郎には次の世代の弟子たちも育っていたのである。これらのことから、小伊三郎（小伊三）や若伊三、伊三子、伊呂葉といった演者は伊三郎門下の第二世代に当たり、明治二〇年代に独立しての興行を試みたのではないだろうか。しかし出演者予告記事から考えると、その試みは長続きせず、結局のところ第二世代の演者たちは師匠や先輩が組織する座に加わって活動を続けたのではないかと考えられる。このことは娘大人形の人気がそこまでの広がりを持ち得なかったことを示しているのではないだろうか。

五、音楽と特殊演出

前章では、明治期に娘大人形の興行が数多くおこなわれたことが確認できた。そこで次に、娘大人形の興行そのものについて注目したい。

はじめに娘大人形の興行の際に用いられる音楽について検討しよう。すでにみたように、明治三〇年（一八九七）四月一五日に東京・浅草公園の「西川伊三郎一座」は娘義太夫によって演じられた（第二章）。したがってその際の演目すなわち、『勢州阿漕浦』平治住家の段、「五斗の鉄砲場」（『義経腰越状』泉三郎館の段）、「貸見世」（不明。質見世〈『染模様妹背門松』質店の段〉の誤記か）、「累の土橋」（『薫樹累物語』土橋の段）、「鏡山御殿」（『加賀見山田錦絵』長局の段）などは義太夫節で上演されたことになる。

さらに新聞記事に取り上げられた興行のうち音楽について言及しているものをみてみると、例外なく義太夫節を用いている。まず明治九年（一八七六）東京・近源亭の興行は、床は娘義太夫（竹本連の浄瑠璃は何れも別品の玉揃ひ）であり、演目は『菅原伝授手習鑑』二段目より四段目迄（車引の段、佐田村の段、桜丸腹切の段、松王屋敷の段、寺子屋の段）、『桂川連理柵』帯屋の段、『源平布引滝』松波檢校琵琶の段、『播州皿屋敷』鉄山館の段である（八月二日付け郵便報知新聞、前掲）。明治一二年（一八七九）に大阪・梅の席でおこなわれた興行も、「竹本段玉、同三吉の一坐」とあるので娘義太夫によるものである（一月二四日付け大阪新聞、前掲）。また明治一八年（一八八五）、東京・東華楼における吉田国之助の興行は、「竹本清花連中」の浄瑠璃で「『太功記』の押通し」を上演する予定と報じられている（二月一

日付け読売新聞、前掲)。さらに明治二十九年(一八九六)に東京・両国回向院で西川伊三郎門下がおこなう興行は、「娘義太夫連中及び大坂初登り数名を加へ」たものであった(一〇月一三日付け万朝報、前掲)。

ところで明治三〇年四月一五日の興行においては、人形が主で浄瑠璃は従であったと思われる(第二章)。しかし人形と浄瑠璃の関係は興行によりさまざまだったことであろう。たとえば明治二二年(一八八九)の宇都宮での興行は「吉田国之助一連の人形と、竹本染子、鶴沢花八連の浄瑠璃合併の一座」(九月一五日付け下野新聞、前掲)であるが、この場合はいわゆる二枚看板で、人形と浄瑠璃はどちらが主あるいは従ということはなく、いわばどちらも主だと考えられる。また浄瑠璃が主体となる一座に人形が加わることもあったであろう。

以上は全て娘義太夫による興行であったが、後で改めて取り上げる大正二年(一九一三)東京・麻布娯楽館での興行は「床の籠太夫」とあり、太夫は男性だったようである(六月二〇日付け東京朝日新聞)。したがって男性の太夫と組んで興行することもあったのである。付言すれば明治三〇年(一八九七)四月一五日の興行においては、人形遣いにも男性が混じっていた(第二章)。娘大人形といっても、必ずしも女性だけで興行をおこなっていたわけではないのである。

とはいえ実際のところ、娘大人形は娘義太夫と組んで興行をおこなうことが多かったと考えられる。そしてこれまでに取り上げた新聞記事でしばしば指摘されているように、娘大人形の遣い手は娘らしさを強調した化粧や髪型、衣裳で舞台上に立ち、それは中年の域に達してからも同様だった。また客の中には、遣い手の容貌が目当ての者が多くいた(明治一三年六月一五日付いろは新聞、前掲)。これと同様のこと

は、従来娘義太夫についてしばしば指摘されることである。すなわち娘大人形は、娘義太夫と共通する土壌に生まれ育ったものだったと考えられるのである。娘義太夫の番付の中に娘大人形の遣い手が登場することは、その一つの表れであろう（図一『明治廿六年改正新版・東京娘義太夫見立番付』、第四章）。

このように、娘大人形と娘義太夫の人気のありようには共通点があると考えられるのであるが、そのことに着目すると、東京以外ではほとんど女性の人形遣いが発展しなかったことも理解できる。つまり娘義太夫の人氣が極めて高かった東京にしてみれば、娘大人形の興行も成立したと思われるのである。とはいえ娘大人形は、娘義太夫ほどの人氣を獲得することはできなかった（第四章）。

次に人形遣いの演技・演出についてみてみよう。娘大人形はしばしば、早替りや見台抜け・懐抜けなどが売り物とされていた。たとえば明治一二年（一八七九）大阪・梅の席での興行では「早替りなども致すといふ」とされており（二月二四日付け大阪新聞）、明治一八年の東京・東華楼での国之助の興行では「早替り、見台抜け、柱抜け、宙乗等をするとの事」と報じられているのである（二月一日付け読売新聞）。

これらは特殊演出であり、早替りは一瞬で人形を持ち替えるもの、見台抜け・懐抜けは太夫の見台や懐から人形遣いが入りするものである。いずれも仕掛けに工夫をこらした上で熟練の技を見せることによって、観客の意表を突いて楽しませる。いわゆるケレンとされ、見た日本位の演出で演劇の本道ではないとして批判されることも多い。しかしこのような特殊演出は、手軽な娯楽として親しまれていた娘大人形にとって、観客を引きつけるための大事な要素の一つだったといえるだろう。

寄席における人形芸ではしばしばこれらの特殊演出が目玉とされてきた。名人として知られた吉田国五

図4. 吉田国五郎の寄席興行ビラ（小沢愛園 1943『世界各国の人形劇』）。



郎もその例外ではなく、寄席に出演した際のビラには「早かわり」という文言がみえる（図四）。広川清は、「西川組の助など云ふ女の人形遣ひの華麗な…刷もの」（広川一九六三、一二五頁）を手にしたことがあったという。娘大人形についても国五郎と同様の寄席興行ビラが作成されていたと思われる。

なお寄席に関して、有力演者や人気演者を集めた「揃い」という刷り物が残されている（図五）が、それには組之助（西川組之輔）も登場している。組之助が当時の寄席の世界の中でそれなりの位置にあったことがわかるが、注目したいのはそこに「娘大人形、早かわり」とあることである。早替りが組之助の

代名詞とされていたことがわかるものだといえるだろう。また明治三二年

（二八九九）一〇月二日付け朝日新聞の記事（前掲）において「手摺の上の早替りより楽屋の内の早替りを見れば」と揶揄されたのも、早替りが組之助の代名詞となっていたからであろう。

さて早替りや見台抜け・懐抜けなどの特殊演出であるが、時としてし損じてしまうこともある。それが新聞に面白おかしく書き立てられたこともあった。まず

図5. 揃い (橋右近 1982『橋右近コレクション・寄席百年』)。上から2段目・右から2列目に「西川組之輔(助)」がみえる。



明治一二年（一八七九）四月九日付け読売新聞には、東京・盛川亭で国之助がおこなった興行の「播州皿屋敷」奥庭」において、見台抜け・早替りが失敗に終わって無様な格好となり、観客からは笑い声が上がったと報じられている。

本石町三丁目の新道の寄席盛川亭へ、去る一日より人形芝居が掛り、二、三日跡のばん、『播州皿屋敷』奥庭の狂言のとき、人形は吉田国之助といふ別品の新造が遣ひ、義太夫は鶴沢勘子の引語りにて、頓て薄ドロの鳴物と共にお菊の幽霊が現はれ、恨みの数々陳べ尽して消え失せるを合図に、国之助は兼ねて高座へ穴を明けて置いて頭から飛び込み、早替りにて三平の人形を遣ふ趣向で、勘子と見台の間へ飛び込むと、どうした機会か、身体が半分入った限りで、胴から下は倒まにニヨツキと突っ立て居て入らぬゆゑ、見物はワイ／＼言つて囃し立るので、国之助はいよいよ気を探んで両足をバタ／＼腕いて居るゆゑ、勘子も堪り兼ねて国之助の両足を抱へて押し込み、漸やく三平の人形も遣ひ終つたが、余ほどをかしかったと、見て来た人の話し。

さらに大正二年（一九一三）六月一〇日付け東京朝日新聞には、西川浜吉が懐抜けをしようとして燭台を倒してしまったという記事が出ている。

娘人形西川浜吉が先夜麻布娯楽館で大ケレンに『廿四孝』を出し、床の籠太夫の懐中から縫ぐるみ

狐を出す機会に燭台を蹴倒す。其火が太夫の頭へ燃えついて「熱いく」の大騒ぎは狐火でなうて飛んだ怪火。

これらは早替りや見台抜け・懐抜けを試みた演者が、不幸にも失敗してしまった事例である。演者にとって不名誉なかたちで注目を集めたものであるが、そのおかげでこんにち娘大人形の演技の一端を知ることができるのである。

六、おわりに

娘（女）大人形あるいは娘（女）人形とは、明治から大正前期にかけて寄席を中心に興行されていた三人遣いの人形芝居である。本格的な演劇というよりは、手軽な娯楽として親しまれていたようである。明治三〇年に娘大人形の興行を観劇した坪内逍遙によれば、入場料は廉価であるものの遣い手の技量は高く、かなりの数の観客を集めていたという。本論では、これまでほとんど注目されてこなかった娘大人形について、新聞や雑誌の記事からその実態に迫ろうとするものである。

娘大人形の代表的な演者としては、五代目西川伊三郎門下の西川組之助および西川錦之助、三代目吉田国五郎門下の吉田国之助があった。新聞の報じるところによれば、西川組之助（本名、大川お町）の生年は弘化三年（一八四七）または嘉永一年（一八四八）、西川錦之助（本名、日置お幸）の生年は明治二年（一八六九）または三年（一八七〇）、吉田国之助（本名、金子お浅）の生年は文久二年（一八六二）また

は三年である。

本論では娘大人形興行の全体像を把握するために、読売新聞および東京朝日新聞に掲載されている寄席の出演者予告記事を調査した。その結果、明治一八年（一八八五）の一月から七月および明治二三年（一八九〇）九月から大正二年（一九一三）一月の間に少なくとも五〇〇の興行が予定されていたことが明らかにになった。これには遺漏があると考えられるので、実際にはもっと多くの娘大人形の興行が寄席でおこなわれていたと推定することができる。

この調査から、明治一八年（一八八五）前半および二三年後半から三三年（一九〇〇）前半までは興行の頻度が高く、この間はほぼ毎日いずれかの寄席で娘大人形の興行がおこなわれていたことがわかった。中でも明治二〇年代前半が娘大人形の最盛期であったと考えられる。一方、明治三三年後半から人気は退潮期を迎えたと思われる。

ところで伊三郎によれば、伊三郎門下の第一世代は組之助および錦之助であるが、両者は明治三〇年代まで息の長い活動を続けている。ところがその次の第二世代は明治二〇年代に独立を試みるも長続きせず、結局は師匠や先輩が組織する座に加わって活動を続けたと考えられる。このことは娘大人形の人気がそこまでの広がりを持ち得なかったことを示しているように思われる。

さて娘大人形は義太夫節によって上演されたと考えられる。男性の太夫とも共演しているものの、多くは娘義太夫と組んで興行をおこなったと思われる。実際娘大人形は、娘らしさを強調した化粧や髪型、衣裳や、容貌目当ての客がいるとされるなど、娘義太夫との共通点が多いといえるだろう。

娘大人形はしばしば、早替りや見台抜け・懐抜けなどといった特殊演出が売り物とされていた。これらは観客の意表を突いて楽しませる見た日本位の演出であり、いわゆるケレンである。手軽な娯楽であった娘大人形にとって、観客を誘引する大事な要素の一つだったといえるだろう。

注

- (1) 三月一日付け東京朝日新聞の「寄席案内」(後述)によれば、これは「娘人形西川錦之助」の興行だったと思われる。
- (2) 同年二月一日付けの読売新聞には、「久しく休席し居たる西川組之助は来初席より四谷金沢に看板を現はす筈」(「芸人消息」組之助の再勤)との記事が掲載されており、理由は不明ながら長期にわたって寄席を休んでいたことがわかる。あるいは一〇月の事件が尾を引いたのであろうか。
- (3) 明治三二年(一八九八)四月一五日付け朝日新聞の記事(前掲)で西川錦之助は、掛け持ちした「山の手の寄席」を人力車で回っていたとされる。
- (4) この時期に、東京府下の芸人の人数を調査した結果が新聞に掲載されている。明治二〇年(一八八七)五月一五日付け東京日日新聞の記事では「操人形」は「男三人、女二十四人」、明治三二年一月六日付け郵便報知新聞の記事では前年一二月末の調査結果として「操人形」は「男一二十七人、女一八人」とされる(いずれも調査機関などは記載なし)。この二人あるいは一人の中に娘大人形の遣い手たちが含まれていると思われる。

参考文献

- 小沢愛園 一九四三 『世界各国の人形劇』 慶応出版社
- 倉田喜弘編 一九八〇―一七 『明治の演芸』 一一八 国立劇場
- 倉田喜弘編 一九九一 『東京の人形浄瑠璃』 日本芸術文化振興会

- 澤井万七美 一九九八 「近代東京の人形遣い―三世吉田国五郎の足跡その他」、『芸能史研究』一四一
- 澤井万七美 二〇〇六 「『東京文楽』と『義太夫人形座』―四世吉田国五郎と吉田新三郎の足跡」、『芸能史研究』一七三
- 橘右近 一九八二 『橘右近コレクシヨン・寄席百年』 小学館
- 広川清 一九六三 「吉田冠十郎の話など」、『三つの人形芝居』 吾妻書房
- 細田明宏 二〇二〇 「寄席における車人形の興行―初代西川古柳と吉田冠十郎」、八王子市教育委員会編『八王子車人形調査報告書』

付記

本研究は帝京大学総合研究機構チーム研究助成金およびJSPS科研費19K00303の助成を受けたものです。

33 明治期の東京における「娘大人形」について

明治23年(1890)												年 月	B 明治三年から明治四二年まで									
12	11		10		9		8		7		6			5		4		3		2		1
下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	
	浅草区寿亭	京橋区築地亭	深川区寿々木	日本橋区大ろじ	神田区無名亭	深川区桜館															西川組之助 麹町区山本	
		芝区山本亭			京橋区川端亭																吉田国之助 四谷区金沢	
四谷区山本亭	神田区大黒亭	本所区松本亭	浅草区広本、 芝区山崎亭	日本橋区寿亭	芝区笑福亭	日本橋区久浜亭															西川錦之助 芝区せんば	
	西川小伊三郎／本郷区喜笑亭				西川小伊三郎／四谷区金沢																その他 西川小伊三郎／品川・佐の十	

明治24年(1891)												年										
11		10		9		8		7		6		5		4		3		2		1		月
下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	
芝区小金井	深川区蛇の目亭	日本橋区高麗亭	神田区無名亭			浅草区寿々木	深川区桜館	下谷区天利亭	神田区岩井亭	浅草区寿亭	本所区都川亭			浅草区東橋亭	深川区寿々木	日本橋区高麗亭	神田区無名亭				西川組之助	
	浅草区石浜亭		日本橋区寿亭			麹町区万長亭	神田区無名亭								本郷区伊豆本				深川区寿々木	日本橋区寿亭	吉田国之助	
芝区笑福亭	神田区日本亭	赤坂区万年亭	浅草区越盛亭				芝区せんば	浅草区新福亭	日本橋区寿亭	本所区万喜亭	浅草区酒恵亭			浅草区石浜亭	浅草区寿亭	浅草区丸生亭、	京橋区青柳亭	神田区松枝亭			西川錦之助	
		西川伊呂葉／深川区桜館	西川伊呂葉／芝区山さき	西川小伊勢／小石川区初音亭、	西川小伊勢／京橋区築地亭	西川小伊勢／浅草区寿亭	西川小伊勢／芝区金本	西川小伊勢／日本橋区久浜亭、	西川小伊勢／京橋区つる仙	西川伊呂葉／下谷区吹ぬき	西川伊呂葉／本所区喜笑亭	西川連／麹町区万長亭	西川伊呂葉／日本橋区久浜亭				西川小伊三郎／芝区さの十	西川小伊三郎／神田区大黒亭	西川小伊三郎／深川区桜館	西川小伊三郎／芝区山本亭	その他	

明治25年(1892)												年						
8		7		6		5		4		3		2		1		12		月
下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	
浅草区新福亭	京橋区祇園亭	下谷区天利亭		赤坂区万年亭	下谷区吹抜亭	日本橋区大ろじ	麻布区麻布亭	浅草区寿亭		深川区蛇の目亭	芝区小金井亭	下	上	神田区無名亭	日本橋区高麗亭	深川区寿々木	神田区いづみ亭	西川組之助
芝区仙波		本所区万歳亭									本郷区菊坂亭			京橋区築地亭	千住町越盛亭	深川区水場		吉田国之助
深川区八名川亭	麻布区福島亭		日本橋区寿亭	四谷区山本亭	芝区仙波亭	品川・さの十	日本橋区久浜亭			京橋区川端亭	下谷区初音亭					日本橋区寿亭	麹町区万長亭	西川錦之助
	吉田金之助／芝区金本	西川若伊三／品川・山ざき、 西川伊呂葉／麹町区万長亭、	西川伊呂葉／深川区桜館	西川伊呂葉／深川区寿々木	西川伊呂葉／浅草区酒恵亭	西川若伊三／京橋区青柳亭、 西川伊呂葉／浅草区酒恵亭	西川若伊三／深川区桜館、 西川伊呂葉／芝区伊皿子亭	西川若伊三／本所区都川亭、 西川伊呂葉／芝区千代亭	西川若伊三／本所区都川亭、 西川伊呂葉／浅草区新福亭	西川若伊三／深川区三つば亭	西川伊呂葉／浅草区丸生亭	西川伊呂葉／本郷区喜笑亭	西川伊呂葉／深川区桜館		むすめ人形／品川・さの十	西川若伊三／本郷区大遊美亭	西川若伊三／神田区今川亭	その他

明治26年(1893)																年								
8		7		6		5		4		3		2		1		12	11	10		9		月		
下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下		
神田区岩井亭	浅草区新福亭	京橋区祇園亭	上	本郷区伊豆本	芝区小金井	日本橋区高麗亭	赤坂区万年亭	麻布区麻布亭	上	浅草区酒恵亭	麹町区万長亭	本郷区喜笑亭	日本橋区大ろじ	上	深川区常磐亭	下	神田区無名亭	下	麻布区麻布亭	芝区小金井	日本橋区大ろじ	深川区寿々喜	芝区千代亭	西川組之助
京橋区築地亭	芝区笑福亭	四谷区山本亭				日本橋区寿亭						浅草区八幡亭	京橋区青柳	麻布区麻布亭	深川区蛇の目亭	日本橋区寿亭	四谷区山本亭	神田区大々亭	神田区今川亭	千住町越盛亭	日本橋区久浜亭	吉田国之助		
神田区大々亭	日本橋区寿亭	本所区緑亭	浅草区長玉亭					日本橋区久浜亭		芝区笑福亭	神田区今川亭	神田区大々亭	日本橋区寿亭	下谷区喜鶴亭	京橋区築地亭	京橋区松川亭	日本橋区石三亭	芝区笑福亭			本所区改良亭	西川錦之助		
																							その他	
																							西川伊呂葉／本郷区伊豆本 西川伊呂葉／京橋区川端亭	

39 明治期の東京における「娘大人形」について

明治29年(1896)														年								
7		6		5		4		3		2		1		12	11	10	9	8	月			
下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上			
深川区常磐亭			浅草区新福亭	浅草区金生亭	本所区都川亭	神田区日本亭	芝区三光亭	四谷区金沢亭		神田区小松亭	神田区日本亭		麹町区万長亭						西川組之助			
神田区神田亭													新宿・堀江亭						吉田国之助			
日本橋区寿亭	日本橋区寿亭	麹町区万長亭		神田区神田亭				麻布区麻布亭	品川・新七福亭	京橋区祇園亭	下谷区鈴木亭		日本橋区寿亭		浅草区金生亭、 深川区常磐亭	芝区八方亭	京橋区松柳亭	神田区大々亭	芝区新金沢	四谷区金沢亭		西川錦之助
																				娘大人形一座／赤坂区琴吹亭	その他	

明治30年(1897)														年										
7		6		5		4		3		2		1		12	11	10	9	8	月					
下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上					
		神田区和泉亭	下谷区鈴木亭	浅草区新福亭		芝区柴寿亭	芝区小金井	京橋区朝田亭	神田区日本亭	神田区松本亭	神田区松本亭	神田区松本亭	四谷区金沢亭			小石川区林亭	神田区松本亭	下谷区鈴木亭	芝区三光亭	京橋区祇園亭	上	神田区日本亭	本所区都川亭	西川組之助
		四谷区堀江亭						四谷区金沢亭		京橋区新富亭	京橋区新富亭	新宿・堀江亭		京橋区青柳亭	神田区小松亭	神田区岩井亭	浅草区万千亭	赤坂区琴吹亭	新宿・堀江亭	麹町区万長亭		浅草区中村亭	吉田国之助	
	浅草区万千亭			下谷区竹の内	小石川区目白亭		京橋区青柳亭	本所区緑亭	麻布区仙葉亭	神田区和泉亭	芝区七福亭	芝区七福亭		神田区小川亭	本所区米本	京橋区松柳亭	浅草区中村亭		麹町区ふじ本	神田区大々亭			西川錦之助	
								紋勝・小鶴・伊佐子／新宿・堀江亭			小鶴・伊三子／神田区岩井亭						西川伊三子／小石川区長久亭						その他	

45 明治期の東京における「娘大人形」について

明治 35 年 (1902)														年							
7		6		5		4		3		2		1		12	11	10	9	8	月		
下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上		
																				西川組之助	
																				吉田国之助	
													本所区金花亭		千住・高島亭	本郷区五大力亭	小石川区目白亭	浅草区长寿亭		麻布区仙波亭	西川錦之助
																		西川浜吉／八王子・王子◆亭	西川浜吉／麻布区広尾亭		その他

明治40年(1907)														年											
7		6		5		4		3		2		1		12		11		10		9		8		月	
下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上		
																									西川組之助
																									吉田国之助
																赤坂区松栄亭								西川錦之助	
																									その他
																									西川浜吉／日本橋区豊久亭
																									西川浜吉／千葉・堀川亭 西川浜吉／芝区新いさら亭

